知ること、伝えること。そして、動き続けること。

／谷碧さん（33歳）

２００８年、20歳の時に訪れたカンボジアで、山積みの頭蓋骨を見た。
ポル・ポト政権時代に大虐殺が行われたキリング・フィールドだ。
カンボジア人の友人が、
「このヤシの木の葉っぱはギザギザになっているので、それをノコギリのように使って首を切りました。」
そう、淡々と案内してくれた。

最後に「僕のお父さんとお母さんは、ポル・ポト政権時代に無理やり結婚させられました。そして僕が生まれた。みぃやは、どう思う?」と。

言葉が出てこなかったが「どんな背景があったとしても、私はあなたが生まれてきてくれて本当によかった」とだけ答えた。
すると彼は少し微笑み、「みぃやは日本人で良かったね。」と言った。
今度こそ、本当に何も言えなかった。

平和ってなんやろう?自分には何ができるんやろう?考えたけど、答えは見つからなかった。

自分の無知さを痛感した私は、カンボジアから帰国するとヒッチハイクで日本中を旅した。
様々な海外支援にも参加したり、バックパッカーとして旅したりもした。
幼い頃から好奇心旺盛だった私は、いろんなことに関心を持った。孤児支援、環境保全活動、災害復興支援やまちづくりなど。
関心があることにはどんどん参加したし、自らイベントなどの企画運営もした。
しかし、『私は、この人生をかけてこれを成し遂げる』というものには出会えないでいた。

２０１１年３月21日。東日本大震災の10日後から宮城県石巻市で復興支援活動に携わった。同年８月には石巻に移住し、２０１３年から石巻市のＮＰＯの事務局長

として、乳幼児から高齢者まで地域の幅広い世代の方々が集まるコミュニティスペースを運営していた。地域の方々から愛され必要とされ、とてもやりがいのある仕事ではあったが、それも一生の仕事にするつもりはなく、いずれは地域の方々に運営を任せるつもりでいた。

震災から10年が経った２０２１年３月、８年勤めたＮＰＯを退職した。
本気で自分の人生について考えた。
「私はこの人生で何がしたいんやろう?」
私は、一つのことを深く深く追求できる研究家や専門家タイプではない。
いろんなことに興味関心があるし、その興味関心も次から次に増えていく。
その『浅く広く』な部分は自分の欠点だと思っていた。
でも、仲間のくれた言葉がストンときた。
「広く浅くでいいんじゃない？　みぃやは、いろんな世界を見て、それをみんなに伝えるメッセンジャーだと思うよ。」

もし、何か１つを極めるとしたら、私は『伝える』と言うことを極めたい。
今まで、日本や海外での活動を通して実感したことがある。
私１人で世界を変えることはできない。

でも、私が本気で動けば、必ず賛同してくれる仲間が現れ、ほんの少しかもしれないけど、世界が変わる。

初めてカンボジアに行った際、スラムで出会ったモデルになるのが夢だという16歳の女の子とファッションショーをする約束をした。
帰国後、スラムの子ども達にプレゼントする浴衣を送って欲しいと呼びかけたら、全国から４００着が集まった。９割以上が新品だった。
翌年、その浴衣をスラムの子ども達にプレゼントし、美容師によるヘアメイクをしたり、みんなで歌を歌ったりヨーヨー釣りやミルクせんべいなどの縁日も行った。
そのスラムをずっと支援している仲間が「スタディツアーの度に、今でも浴衣を着てるんだよ」と話してくれた。

２０１０年１月12日、ハイチで大地震が起きた際、募金以外に何かできることはないかと、仲間と共に１，０００人が１羽ずつ折って作る千羽鶴を届けに行こうと呼びかけた。30万人以上が犠牲になったハイチには、自分は助かったけど家族や友人を失ってしまった、そんな人が多くいるはず。震災直後は世界中から支援が入るだろう。救助活動や衣食住など身の安全の確保で現地も混乱しているだろう。

しかし、状況が落ち着いた時、残された人たちは心にぽっかり穴が空いてしまうんじゃないか。そういった方々に「住んでいるところは離れているけど、あなたのことを思っている人がこんなにもいるよ」と、自分たちの手で届けに行って、生きていてくれてありがとうとぎゅーっとハグをしたい。私たちは、心の支援をしたい、と。その呼びかけは数日のうちに反響を呼び、全国紙の取材も受けた。しかし、主旨をきちんと伝えることができず「この混乱下に千羽鶴を送りつけるなんて迷惑でしかない」と大炎上した。容赦ない誹謗中傷や嫌がらせに傷付いたけれど、「私にはみぃやさんの想いが伝わっています」「応援しています」「ハイチの人に届けてください」と、毎日毎日ポストに鶴が届き続けた。

数ヶ月後、集まった鶴は3万羽を超えた。3万の想いが本当に迷惑なのか、私にはわからなかった。

ハイチのことはハイチの人に聞こう。西麻布にあるハイチ大使館を訪れ、大使に経緯を伝えたところ「日本に来て数年経つけど、こんなにも素晴らしい日は初めてだよ!そんなにもたくさんの人がハイチのことを想っていてくれたなんて!」と快く受け入れてもらえた。

ハイチ大使の協力のもと、2011年4月にハイチに行く予定で動いていたが、ハイチ国内でのコレラの流行や東日本大震災、大使の退任や私の妊娠・出産、ハイチの治安悪化などで計画は白紙に戻ってしまった。

だが、いつか必ずみんなから預かった想いを届けに行く。

2011年8月。震災から5ヶ月の石巻で、音楽の力で元気を届けようとフェスを主催した。私の所属団体からは「今は音楽じゃないでしょ」との声もあったため、私個人の活動として、石巻で活動する団体の垣根を超えて実行委員会を立ち上げ運営した。

当日、500人以上が会場に集まり熱狂していた。間違いなく、あの数時間だけは、あそこにいたみんながつらいことや悲しいことも忘れていたのではないか。当初反対していた仲間も「あの光景を見て、今の石巻に必要なことだったんだなって思った。」と言ってくれた。数年後、石巻のライブハウスで、フェスに参加してくれた女の子と再会し「あのフェスは本当に最高でした!街に音楽がなかったから。」と感謝された。

医療や衣食住などの支援が最優先なのは間違いないが、心の支援の大切さも実感した。

ヒッチハイクで旅していた時、自分が今まで携わった活動の話などをすると、関心を持ってくれる方や応援してくれる方、自分も参加したい!と言ってくれる方がたくさんいた。

「教えてくれてありがとう」という言葉も数え切れないくらいもらった。

私の勤めていたＮＰＯの運営するこども図書室に来てくれる子ども達の中には「将来ここで働きたい！」と言ってくれる子が数人いた。彼女達が本当に働くかどうかはわからないが、小学生の『将来の夢』にＮＰＯ職員が挙がるのはすごいことだと思う。

みんな、興味関心がないわけじゃない。
ただ知らないだけ。
「こんな国があるよ」
「こんな街があるよ」
「今、こんな課題があるよ」
「でも、解決するためにこんな活動をしている人がいるよ」
それを伝えると、動き出す人がたくさんいる。

前述のこども図書室に『ひろしまのピカ』という絵本があった。
私が生まれる前からある、原爆の恐ろしさや悲惨さを描いたあまりにも有名な絵本だ。
その絵本の表紙を見て、こども達が「うわーこの人、おっぱい出てるー」と笑っていた。

私は「これは、昔日本が戦争をしていた時に、広島に原爆が落とされた話で、この女の人は服が爆弾で燃えちゃったから裸なんやで」と真剣に伝えて、そのまま絵本の読み聞かせをした。その後、その絵本を笑う子はいなかった。
その中の一人が教えてくれた。「戦争の話や写真はトラウマになっちゃうから、学校では詳しく習わないんだよ。」私は衝撃を受けた。低学年の子達は原爆のことも知らなかった。
確かにショックを受けるかもしれない。幼い頃から戦争に触れる必要はないと考える人もいるのかもしれない。
でも戦時中はたくさんの子ども達の命も犠牲になった。たった今も、海外では、子ども達の命が奪われている。

私は、自分の娘や子ども達に、戦争や貧困、人身売買、環境破壊、差別など、この世界にはたくさんの課題があることをしっかり伝えたい。
それと同時に、その課題に向き合い、動いている人たちがたくさんいることも伝えていきたい。

『１人で世界は変えられない。
でも、力を合わせれば必ず変えられるよ』と。

内モンゴルの恩格貝という地域はかつて広大な砂漠だった。
しかし、遠山教授という1人の日本人が中心となって、たくさんの人たちと共に木を植え続けた結果、私が訪れた時、恩格貝は森になっていた。
本気で変えたいと思い、動き続ければ、砂漠を森にすることだってできる。

数十年前まで肌の色が違うだけで多くの人が虐げられていた南アフリカでも、白人も黒人も私たち日本人も一緒になって歌い踊った。南アフリカには、11もの公用語があり、国歌も5つの言語で構成される。小学校に畑を作りに行った際、国歌を教えてと言ったら、白人が使用するアフリカーンス語や英語の部分も一生懸命歌う黒人の子ども達に、虹の国の将来を垣間見た。

東日本大震災直後、アメリカの自衛隊の方々が用意してくれたお風呂で受付を行っていた際に、入浴しに来た中学2年生の男の子が「アメリカの人って、とっても親切なんだね。」と目を輝かせ、学校で習った英語で一生懸命自己紹介をして話しかけている様子に胸がいっぱいになった。80年前を生きた先輩方に、彼らのやりとりを見てほしい。

世界は変わる。変えることができる。私たちの手で。

私は、これからもたくさんの世界を見ていきたい。
そして、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じたことを、より多くの人に伝えていく。もちろん、子ども達にも。
みんな、ただ知らないだけ。
私の使命は伝えること。
仲間を増やすこと。
そして、自分自身も動き続けること。

初めてカンボジアに行った時から14年経ってしまったけど、やっと自分なりの平和への向き合い方を見つけた。